

## 制作の起源、批評の技術

The Origin of Execution, The Technology of Critique

岡崎乾二郎×中谷礼仁×田中純

Kimihito Ozaki × Norihiro Nakatani × Jun Tanaka

### 批評の領域

**田中純**——建築家・青木淳氏と青木淳建築計画事務所の元所員で現在は西片建築設計事務所を主宰している小野弘人氏の間で争われた、いわゆる「アルマジロ人間」問題については、二〇〇六年二月の高裁決定書で原告の申し立てが棄却され、それと時を同じくして青木淳氏のコメント発表があり、係争は一段落しました。今日はこの問題を掘り下げることが目的ではありませんが、しかしここで決定的に露わになった、芸術をめぐるクリティカルな争点を発見するための批評の不在、メディアの機能不全という状況を今再びどのように捉えることができるか、問題を敷衍してお一人にお伺いしたいと思います。

また、昨年九月にこの三人も顔をあわせたジョージ・ジュークラーに関するシンポジウムがありました。そこでは歴史と批評、批評としての歴史、その可能性と方法論が問題になりましたが、今日はシンポジウムでは積み残しになった問題も扱いたいと思います。またクーブラーの方法論は、中谷さんの二連の都市論的方法とも関連が見出されますが、中谷さんはなぜ自身の研究分野を「歴史工学」と名付けているのかといったことも伺いたい。つまり、歴史

をめぐる問題に接続しながら、批評の方法と可能性について考えていきたいというのが今日の主旨です。

議論の背景となる参考文献としていくつか挙げておきますと、ジョルジュ・デュレイユ・ユベルマン『イメージ、それでもなお——アウシュヴィッツからもぎ取られた四枚の写真』平凡社、二〇〇六、岡田温司『芸術と生政治——現代思想の問題圏』平凡社、二〇〇六、あるいは中谷さん主宰の編集出版組織体アセテートが刊行している『都市の血肉』シリーズ二〇〇六、そしてまだ邦訳が出ていませんが、クーブラーの『時のかたち』(The Shape of Time: Remarks on the History of Things, Yale University Press, 1962)がベストです。クーブラーは数学的なメタファーと並んで進化論的あるいは遺伝学的なメタファーを使っているということもあり、問題系の接点にあるものとして三中信宏『系統樹思考の世界——すべてはツリーとともに』講談社、二〇〇六も挙げておきます。三中信氏は、人文知と進化論的な知が重なり合う領域にも系統樹思考を見出し「こう」という発想を持っている。そうした発想とクーブラーがつながるのか、またはつながらないのか。そして、芸術作品やものの歴史を綴るうえで共通する問題領域を開けるのか。そういったことについても意見を伺いたいと思います、以上の参考文献を挙げておきます。

まず、「アルマジロ人間」の話題から入っていきたいのですが、私たち三人と松浦寿夫さんが『InterCommunication』No.58 (NET出版、二〇〇六誌上)で見解の表明を行いました(その次の号には岡田温司さんの見解も掲載されています)。私個人の意見としては「倫理的ではない合法的な権限」が単に最高裁で確認されただけで、批評における論争は一切なかったと言ってしまうと思います。そもそも四者の立場もそれぞれ異なっていました、われわれが『InterCommunication』で語った以外は、表立ったかたちでこの件をめぐる批評的言説は現われなかった。まずはこのこと自体が問題だと思うのですが、このあたりの状況を現時点でどうとらえているのか、ということをお伺いしたいと思いますね。